辞任の言葉

片桐憲一

新年明けましてお目出度うございます。
町民の皆様の御幸福を祈ります。

さて私は去る八月限り公民館長の職を引かせていたゞきました。顧みてこの一カ年は白根町公民館が生まれての最初の年であり、すべてが生みの悩みの連続でありました。然し幸いにして委員各位並に町民の皆様の絶大なる御支援を得まして、輝しいとは言えなくても、一応その基礎を築くことが出来ましたことを、衷心から喜んでいます。勿論これは私の力ではなくて、委員並びに町民各位の愛町の誠心の然らしむるところでと、固く信じこゝに深甚なる感謝の意を捧ぐるものであります。誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

目下の國際情勢、國内事情から見まして、われ〳〵の前途には幾多の難問題が伏在しています。公民館の使命の重大さが倍加していることを痛感いたします。

この際後任として塚田名館長を得ましたことは、町の爲めこの上なき幸福と喜んでいます。

最後に
白根町の発展を祈ります。
町民各位の御多幸を祈ります。

生活改善は　まず婚禮簡素化から

十二月十二日白根郷連合婦人會の結成をみたが、その際、次のような生活改善案を申し合わせ、これが実施に万善を期すべく、猛運動を展開中である。

結婚について

(1)話が具体化した時健康診断書をとりかわすこと
(2)籍の移動は挙式後速かにすること
(3)道中着を廢止して有り合せのもので間に合わせる
(4)一切の飾替は廢止する
(5)調度品は飾らぬこと
(6)料理は合理的に簡單にし、引物を廢止して無益な出費を省く
(7)招待された時の祝は簡素にして心からお祝いすること
(8)嫁に雪玉等を投げつけるろう習をやめること
(9)式場は隨意であるが、なるべく公民館、神社などを利用して簡素厳粛にすること

初子について

(1)婚家で生むことを原則とする
(2)費用は一切婚家の負擔とする
(3)客は産婆さん、母親程度とする
(4)餘裕は貯金して將來の学資などにする

佛事について

(1)三十五日と葬儀は同時に行いなるべく一日ですませる
(2)花輪は廢止する
(3)三十五日の引物は廢止する
(4)勝手酒は廢止する

壹萬圓の幸運はどなたに！

…商工會の大賣り出し…

白根町商工會では、一月九日町役場で臨時総會を開き、恒例の年末年始大売り出しその他を催すことに決定、華々しくふたをあけた。今年最後の奉仕と、新年を迎えて沈滞しきっている経済面に活を入れ、景気を吹きとばす意氣込みで年末年始大賣り出しを[illegible]二十九日から新春四日まで盛大に催す。特賞に壹萬円、一等五千円その他二十本以上の抽籤者には特別二重景品を進呈する外末等景品の引き上げなど景品内容を思いきつて充実した。同會ではお客様の御期待に充分添い得ることを確信している。

▽消防自動車増設　防火体制完壁△

去る町議會に於いて議決になつた、消防自動車の増設は、其の後ニイガタ・ニュー・モータース商會に於いて、技術陣のエイ智を結集して、昼夜兼行にて作業続行中であつたが、此處に完成、其の英姿を町民に誇示している。此の新鋭消防自動車はフオード三十八年型、三十馬力のエンジンを備え、ホースは二口放水は三方吸水可能の能率的なもので、約四十万円を要したものである。

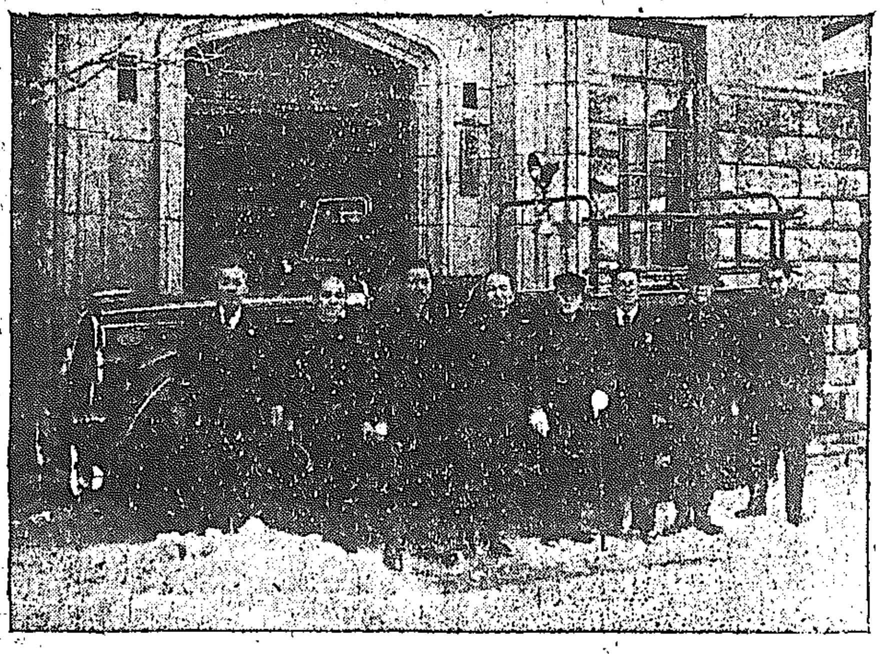
此の新鋭車配置に伴い、旧第三分團は解散し、永年消火第一線に挺身せられた團員の表彰をあわせて労をねぎらつた。

新編制の第三分團は
分團長　小山三一郎氏
副分團長　渡邊榮太郎氏
副分團長　今井三代市氏
の下、團員一致結束して消火體制の万全を期している。

直接新鋭消防自動車をあずかる小山分團長は語る。

「町民皆様の理解と協力によつて生まれたこの新鋭車をあずかるにあたり、その責任の重大さを痛感いたすものであります。分團員一同有事即応の態制を常にとゝのえ、以つて町民の期待にそむかぬよう決意をあらたにしている次第であります。」

今や白根町消防團は消防自動車二臺となり、ガソリンポンプはその万全たる整備と共に益々町民の安全感を増し、團長長谷川豊藏氏統卒の下にゆるぎなき消火陣は確立せられたのである



火の用心

火災の場合は　三〇三番　二五番

趣味藝能のつどい

釣大會

昨年九月二十三日第二回町民釣大會を決行した。参加人員は数百名に及び、絶好の大會日和に、大公望連は味方下江の鮒を釣り盡くす感がありその優劣は最後の五分まで豫測を許さなかつたが、次のような戰跡となつた。

個人一等　松本忠一
二等　竹石末吉
三等　大関末四郎
團体一等　櫻町第三
二等　魚町第五
三等　四ノ町
大魚賞　松本忠一

俳道講習會

十月十五日俳道普及講習會を開いた。受講者は初めての試みであり、比較的少なかつた事は残念であつたが、趣味人以外の顔も見え、実に熱心な受講振りで弦巻講師も賞讃の辞を惜まなかつた。

俳句大會

文化祭の一行事として十一月一日第二回の町民俳句大會を開催、各派合同老若男女見晴屋の廣間に於いて句作三昧にふけつた。

舞踊大會

同じく一日二日と白根座に於いて日本舞踊藝能大會を催し盛會であつた。

圍碁將棋大會

第一回の町民の大手合わせをこの文化祭に織り込んで挙行した。最初の試みとしてその成果は危ぶまれておつたが、同好者諸氏の奮闘で時間的な困難を克服して有意義な催しとして成功する事が出來た。

圍碁の部
個人一等　渡部泰次
二等　えび澤正光
三等　巻口直則

將棋の部
個人一等　金子正男
二等　杉澤由市
三等　塚田新一
團体一等　能登チーム
二等　一ノ町チーム

展覽會

文化祭會場では菊花、画、生花書、寫眞などの一室を見ても、昨年來の努力研究の結果、一段の進歩と充実が見られた。

白根町略史　(一)

伊丹末雄

大昔現在の越後平野は陸地ではなかつた。この平野の地質は第四紀の新層で、信濃川、阿賀川の沖積地であるが、白根附近の土地はガス井戸を掘る人々に聞いても教えてもらえる通り、掘つて行けば三度砂利の層に突き當たるのである。この層は即ち古い水底であるに違いない。

越後の古図として知られている「康平三年図」(西暦一〇六〇年)「寛治三年図」(一〇八九年)が共に実は後世(おそらくは江戸時代後期)の僞作であることは、古文書学の立場から餘りにも明白であり、(小林存氏著「縣内地名新考」參考)また地理学、地質学の研究者の廣く認めるところであるが、しかし明治以前としてはすぐれた知識人が巧みに想像して書いたものであつて、越後平野を海としていることなどはやはり卓見といわなければならない。

德重英助氏の説(市村玖一氏記錄、「地理学評論」所藏「越後に於ける僞沈降現象と最近に於ける海岸線移動」)によれば越後地方は二百米段丘の成立後百米隆起時代を経て後一度沈降し、現在は再隆起の時代に入つているのであるという。そうして下越地方に古くから傳わる地面沈降の傳説は、多分石器時代から起つたのであり、その影響は約八百年前まで続き、越後の人文に大きな力を加えたと考えられ、八百年前の海岸線は、七十米の上昇を通じて今の西蒲原郡小吉村地内であつたと推定されるという。

こゝに念のため記して置くが「萬葉集」を検討すれば、大宝二年、七〇二年までは少くとも越後國は越中國に含まれていたのであることが明かであるから(彌彦山の歌から)わかりやすくいえば「古事記」ができる少し前にわかれて越後となつたのであつた。(和銅五年、七一二年に越後は七郡にわけられている。)

信濃川、阿賀川の運搬する土砂は、次第にこの平野を陸地として行つたのであるが「溝口家文書」(溝口家は江戸時代の新發田藩主)中の「豊田神社御祭神略傳」(江戸時代)にさえ「信濃、阿賀の二大川氾濫横溢し、東に加治放生、佐々木の諸川あり、西中ノ口刈谷田、五十嵐の諸川あり、一封殆んど湖沼たり。四周の地を山と云い島通と云い、濱通と云う。纔かに村落の点在するのみ。」とあるのを見ても、それ以前の當地方の姿は大体想像できよう。

加うるに応永九年、一四〇二年の冬當地方に大地震があり、津波を伴つて地面沈下したと傳えられている

わが白根郷に人が住むようになつたのは、今からおよそ五百年前のことであると私は推定するが、この沼澤だらけの土地に最初に移り住んだのは、南朝に屬して敗れはてた新田氏の殘黨であつたという。(中田薫氏「國家学會雜誌」所載「越後の割地制度」)

戰國時代に入つて、享祿四年(一五三一年)に生まれた上杉謙信は、若くして越後を平定したが、當地方に殘存する住民を励まし、恢復に當たらせ、守護代長尾氏は復興に志ある士を募つた。

ちょうど全國が戰乱に苦しんでいた時であるから、謙信の威武と善政によつて穏かであつた越後にあこがれて、加賀、越中の農民、近江の商人等が相次いで來住したが、それより少し前に謙信と武田信玄の数度の川中島の合戰によつて、信濃の農民が難を避けるためにかなり移住したのである。(中田薫氏の上記の論文)そうして白根の名家袖山氏の祖半兵衛重勝もまたこの戰に從軍し、天正二年、一五七四年敗れてこの地に逃れたのであつた。(「袖山家文書」)

長尾守護代は須田城(須田村字後須田)に須田大炊、庄瀬ノ館(庄瀬村字庄瀬)に庄瀬新藏を置いて開拓させたという。當時まだ白根はよく拓けてはいなかつたのである。

しかし「恵光寺文書」によれば、永祿二年、一五五九年恵光寺(日蓮宗)が初代日勝によつてすでに創立しているのであるから、袖山半兵衛が來る前に白根はどうやら村落とはなつていたであろうと考えられる。人家がかなりなければ、寺院ができるはずがない。

ところで「白根」という地名の起源について簡單に記すが、「袖山家文書」によれば「祖半兵衛重勝は、三十二才にして川中島の合戰に敗れ、信州より退去し、天正二年六月この地に來りて開發す。(中略)何故よりも蘆の白根のみ出でしにより白根と名付けたり。」となるが、「恵光寺文書」と予盾するわけである。

また現在の西蒲原郡味方村字吉江に當時城があつたので、その「根」というわけで「城根」と呼ばれ、後に文字が「白根」と改つたといゝ、また「白根神社文書」によれば、永祿五年五月同神社を祀ることを里人に勸めた上杉家の臣畜根某が、自分の姓から、「萬葉集」中の「奥山ノ磐本スゲヲ根フカメテ結ヒシコヽロ忘レカネツモ」「白スゲノ眞野ノハリ原」(入り乱り衣匂はせ旅のしるしに)」(かつこ内は筆者の補記)をと考え、「白根神社」としたが、この「白根」が地名となつたというのであるけれども、最後の説はどうもこじつけのように思われる。

結局、袖山半兵衛個人の命名ではなく、誰いうとなく蘆の白根によつて「白根」と呼んだか、または信濃からの移民が故郷の地名(「白根」という土地があるのである。)を以つて名付けたかということになるのではなかろうか。

「城根」説は吉江とこの町(西蒲原郡味方村字白根を含めて)が[illegible]距つていることからもやはりいくらか危な氣があるように思う。

次に現在俗に「白根島」と呼ばれている大きな島は、江戸時代までは「河中島」また「小吉島」と呼ばれていたことが、臼井村字下八枚の「越後諏訪社棟札」に「河中島」い「越後治乱記」に「川中島」と書かれていることからも、例の「康平三年図」に「小吉島」とあることから知られるが、「小吉島」については小林小市郎氏の「郷土史」に、「吉川、小國氏の所領錯雜せしにより小吉島とも稱せり。」とある。そうして、現在の小林村の字戸頭がもと「小吉村」という村であつたこと(「小林村誌」)は大いに注意されてよいと思うのである。

冬瓜

長谷川杉郎

霜月ひのさすひととき小鳥の鳴くひととき
一本ぶらさげて來るをとこに河の鯉
暮色
つはぶきの花から黄いろい印象うけて居る居間
野いばらの実粒、赤く山が見えてり
坊さまは宗教と何か
が世間の冬瓜